

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもは、お手伝いが好きです。

私の娘が通う保育園では、3〜5歳児の子どもたちが一緒に過ごすタテワリ保育が行われています。長女は3歳のときに引越しの都合でこの園に転園しました。転園当初は、ロッカーの位置やおもちやの場所、給食の片付け方など、わからないことが多く戸惑っていたのですが、年上の子どもたちが自主的にいろいろと教えてくれ、お世話をしてくれました。折り紙がうまく作れないときは5歳のお姉ちゃんが教えてくれたり、お昼寝で寝つけなときは手を握ってくれたりすることもあったそうです。

1 お手伝いは年上の子どもが年下を助けるだけではありません。私が保育園に娘を迎えに行ったとき、同じ年の子どもが「〇ちゃんの水筒はこれで、タオルはこれです」と娘の持ち物を渡してくれるのです(互いの持ち物までよく覚えていいるなあと感心します)。頼んでもいないのに帰る準備を手伝ってくれる姿に、子どもたちの優しさを感じます。

赤ちゃんも、お世話されるだけでなく、お手伝い行動を見せることがあります。次女が通う保育園の0歳児クラスでは、お外遊びの時間になると、ジャンパーの渡し合いが始まるそうです。自分が着るよりも、お友達にどうぞと渡してあげたい気持ちの方が強く、追いかけていになることもあるようです。

研究によると、1歳6ヶ月の赤ちゃんが、自発的に困っている大人(実験者)を手助けする様子が観察されています。たとえば、大人が両手にたくさんの荷物をカカえながらクローゼットの扉を開けようとしていると、赤ちゃんは頼まれなくても自分から扉を開けに行くのです。他にも、大人が落としたペンを拾ったり、本を積み上げるのを手伝ったりと、赤ちゃんがさまざまな場面で他者を助ける姿が確認されています。

1、より幼い1歳2ヶ月の赤ちゃんでも他者を助ける行動が示されています。運動能力が十分ではないため、お手伝いの範囲は限られますが、困っている人を見て自然に助けようとする姿は、「小さな助っ人」と呼びたくなるほどです。

赤ちゃんのお手伝い行動が内発的な動機から生まれていることを示す研究もあります。実験では、1歳8ヶ月の赤ちゃんが援助行動をした際に、①何も報酬を与えない、②お礼を言う、③物理的な報酬ほうしゅうとしておもちやを与える、という3種類の反応をしました。その後、赤ちゃんの援助行動がどのくらい続くかを比較したところ、③のおもちやを与えられた赤ちゃんは、次第に援助行動が減少することがわかりました。

2、赤ちゃんは自分から進んで行っていたお手伝いを、おもちやが与えられるとしなくなるのです。これは、赤ちゃんにとってお手伝いは、自分がやりたいからしている行動であり、おもちやというご褒美がその動機を弱めてしまうと解釈されています。お手伝いをしてくれたときには、ものを与えるのではなく、感謝の言葉を伝える方がよさそうです。

さらに、子どもは誰を助けるかを選ぶようになります。3歳児は、他人に親切だった人を進んで助ける傾向があり、意地悪いじわるをした人あまり助けません。1歳9ヶ月の赤ちゃんでも、相手の意図いどうを考慮して助ける相手を選ぶことが示されています。

3、2人の大人が赤ちゃんにおもちやを渡そうとする実験があります。1人はおもちやを渡すふりをしてからかい、もう1人はおもちやを渡そうとしますが落としてしまいます。その後、この2人の大人が困っている様子を見せると、赤ちゃんはAではなく、Bを助けました。

赤ちゃんは、相手の行動の意図を見極めて援助行動をしているのです。

ある日、子どもたちにおもちやを2ついただきました。2人の子どもたちに1個ずつ渡そうとすると、長女が2つとも持っていてしまいました。0歳の次女は「うー！ うー！」と抗議します。長女が2つ取り、次女が何ももらえないという分け方は平等ではありませんから、次女の抗議はもつともなことです。

では、赤ちゃんはいつから公平さを感じるようになるのでしょうか。赤ちゃんの分配行動は、1歳半頃からみられるようになります。この時期の赤ちゃんは、他人の欲求や悲しそうな表情に応じて、お菓子やおもちやを分けることがあります。

ある実験では、1歳6ヶ月と2歳の赤ちゃんに4つのお菓子を渡し、実験者には何も与えられない状況を作りました。その状況で実験者が悲しそうな顔で手を差し出すと、約半数の赤ちゃんが自分のお菓子を分け与えました。一方で、赤ちゃんの実験者がそれぞれ2つのお菓子を持つている場合には、実験者に分け与える行動はみられませんでした。

4 このことから、赤ちゃんは他人の状況を見て、分配行動を決めていることがわかります。さらに、別の研究では、実験者が手を差し出さなくても、悲しそうな表情や視線だけで、約半数の2歳児が分配を行うことが示されています。

赤ちゃんが平等な分配を好む傾向は、早い時期からみられます。10ヶ月と1歳4ヶ月の赤ちゃんを対象にした実験では、人形劇を使っておもちやの分配場面を見せました。ある人形はおもちやを2人に平等に分け、もう一方の人形は片方だけに与える不平等な分け方をしました。その後、赤ちゃんにどちらの人形を好むか選ばせたところ、10ヶ月の赤ちゃんは特に偏りへんりはなくどちらも同じくらい選びましたが、1歳4ヶ月の赤ちゃんは平等に分ける人形を選ぶ傾向がありました。つまり、この頃になると、赤ちゃんは平等な分け方を好むようになります。

4、1歳3ヶ月の赤ちゃんを対象とした実験では、実験者が2人の大人にお菓子を平等に分配する場面と、不平等に分配する場面を赤ちゃんに見せ、そのときの注視時間を測定しました。その結果、赤ちゃんは不平等な分配場面をより長く見ていました。これは、赤ちゃんが平等な分配を期待しており、不平等な分配を変だなど意外に感じ、注視時間が長くなったと考えられます。

これらの実験から、赤ちゃんは1歳を過ぎる頃から平等な分け方を好むようになることがわかります。平等な分配への意識は、ごく早い時期から育ち始めているのです。また、他者に配慮して分配する赤ちゃんほど、他者が平等に分けることを期待するような注視行動を示しており、赤ちゃん自身の分配行動と平等への期待には関連があることがわかっています。

さらに、赤ちゃんは労力に応じた分配も期待しているようです。ある実験では、1歳9ヶ月の赤ちゃんに2種類の映像を見せました。1つ目の映像では、2人の大人がおもちゃで遊んだ後、それぞれが半分ずつ片付け、その後、2人に平等に報酬が与えられました。2つ目の映像では、1人がすべて片付け、もう1人は遊び続けていたにもかかわらず、2人に同じ報酬が渡されました。

これらの映像に対する注視時間を測定したところ、赤ちゃんは後者の映像をより長く注視していました。赤ちゃんがたくさん働いた人が多く報酬を受け取るべきだと感じており、働かなかった人にも同様の報酬が与えられることに驚いていると考えられます。

この研究から、赤ちゃんは公平性を好むだけでなく、労力に応じた分配を期待していることがわかります。これは、人間が生まれながらにして公平感<sup>6</sup>を持っている可能性を示唆<sup>a</sup>しているのかもしれませんが。

我が家では、家庭菜園でミニトマトを育てています。毎朝、3歳の長女は夫と一緒に水やりをしていますが、グウタラな私は家の中にいて労働の戦力外です。いざ<sup>5</sup>シユウカクして食べる段階になると、娘は自分と夫のお皿にミニトマトを多めに分けました。労力を払っていない私にミニトマトを平等に分配するのはおかしいという娘の判断は、もつともなことだと思いました。

(奥村優子『赤ちゃんは世界をどう学んでいくのか ヒトに備わる驚くべき能力』による)

問一 ①②③④⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 ①②③④⑤を補うのに最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり イ また ウ さらに エ しかし オ それから カ たとえば

問三 a・bの意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a ア 消極的に評価する。 イ はつきりと断定する。 ウ 前提条件とする。 エ それとなく気づかせる。  
b ア 一番すぐれている。 イ 道理にかなっている。 ウ 尊敬にあたいする。 エ 未熟なところがある。

問四 ①「お手伝いは年上の子どもが年下を助けるだけではありません。」とありますが、他にどんな関係性での援助行動が指摘されていますか。文中から二つさがし、それぞれ簡潔に答えなさい。

問五 ②「おもちゃを与えられた赤ちゃんは、次第に援助行動が減少する」について、それはなぜだと考えられていますか。文中から二十五字以内で、「くから。」につながる形で抜き出しなさい。

問六 ③「自分がやりたいからしている」と同様のことを表している六字の表現を、文中から抜き出しなさい。

問七 A B に入る最も適切な表現をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア お世話してくれた大人  
イ 悲しそうな表情をした大人  
ウ 渡そうとしておもちゃを落とした大人  
エ 感謝の言葉を伝えた大人  
オ からかった大人

問八 ④「このこと」が指す内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア お菓子を赤ちゃんだけに渡し、実験者に与えなかった場合には、2歳の赤ちゃんの約半数に分配行動がみられたのに、10ヶ月と1歳4ヶ月の赤ちゃんには実験者に分け与える行動がみられなかったこと。

イ お菓子を赤ちゃんだけに渡し、実験者に与えなかった場合には、約半数の赤ちゃんに分配行動がみられたのに、赤ちゃんと実験者に同じ数のお菓子を渡した場合には分配行動がみられなかったこと。

ウ お菓子を赤ちゃんだけに渡し、実験者に与えなかった場合には、実験者の悲しそうな表情や視線だけで分配行動が行われたのに、赤ちゃんと実験者に同じ数のお菓子を渡した場合には、実験者が手を差し出さないと分配行動がみられなかったこと。

エ お菓子を赤ちゃんだけに渡し、実験者に与えなかった場合には、ほとんどの赤ちゃんに分配行動がみられたのに、人形劇を使って分配場面を見せた場合には、お菓子を分け与える赤ちゃんは約半数だったこと。

問九 ⑤「赤ちゃんは1歳を過ぎる頃から平等な分け方を好むようになる」とありますが、なぜこの頃だと言えるのですか。実験の内容をふまえて説明しなさい。

問十 ⑥「公平感」とありますが、ここでの「公平」の内容が具体的に示された二十字程度の表現を、文中から抜き出しなさい。

□ 次の文章は、いとうみく『朔と新』の一節です。朔と弟の新はバス事故に巻き込まれ、朔は視力を失いました。高校生になった新に、朔はブランドマラソンの伴走者になってほしいと頼みます。事故の後、走ることから離れていた新は兄の伴走を引き受けることになり、二人の練習が続いています。

これを読んで、後の問いに答えなさい。

ジジッと頭上でセミが鳴き、うしろからバイクが風を切って走りぬけていく。

「十五メートルくらい前にひとり、その先にもうひとりいる。ふたりとも右側から抜くよ」

小さくロープを動かし、新は朔に腕を当てて右側へフクらんだ。朔もそれに合わせていく。数秒後、自分たちの足音に、もうひとつ足音が混じる。足音が大きくなり、荒い息づかいが聞こえて、すぐにそれはうしろへ消えていく。

「はい、抜いた。このままもうひとり抜くよ」

たつたつたつと、心地よい足音が朔のからだの内をはねる。

ふたりを抜いたあと、新は腕時計を見た。

「もう少しペース上げられる？」

うん、朔が頷くと、「よし」と、新はわずかからだを前に倒した。

1 スピードが上がる。それに朔もついていく。

ぼおぼおと風の音が強くなる。

「ラスト一周、このペースで」

リョウカイ。

「ラスト五十」

風音にのって新の声が響く。

「三、二、一、オッケー」

新の声に 2 力を抜いて、朔は足を止めた。心臓の音が速い。息があがっている。肩を揺らして膝に手をつくとき、からだ中の汗が噴き出し、あごを伝った。

「いまのが一キロ五分。きつかった？」

「い、いや、大丈夫」

朔は大きく息をしながらからだを起こした。

「じゃあ、今度から少しメニュー変えようか」

「え？」

思わず朔が聞き返すと、新は朔に腕を貸して広場へ歩き出した。

「決めた距離を走るっていういままでの練習は、持久力とか筋力をつくけどタイムはなかなか上がらないし、上げたタイムをキープするのは難しいんだ」

新からこうした話を始めるのは初めてのことで、朔は戸惑いながら相づちを打った。

「持久力とスピードの両方を支えていくのが心肺機能。これが鍛えられると持久力もあがるし、俄然走れるようになる。いまラスト一周だけペースあげたら息、切れたでしょ」

「そりゃまあ」

「うん。簡単に言うと、いまみたいに息切れする状態を作るトレーニングが必要ってこと」

広場に着くと新はストレッチをしながら話を続けた。

「心肺機能を高めるトレーニングっていうのはいくつかあるんだけど、オレが中学んときやってたのは、ウインドスプリント、ビルドアップ、インターバルとかで」

ちよつと待って、と朔が口を挟む。

「それどんなのか説明してくれないと」

「あ、ウインドスプリントっていうのは、ジョグのあとに、百メートルくらいの短距離を全力シツソウの七、八十パーセントの力で数本走るトレーニングのこと。筋肉の使いかたもジョグとは違うし、歩幅も腕の振りも自然と大きくなるからフォームもダイナミックになる」

「きつそうだな」

朔がつぶやくと新はにやりとした。

「きついよ。オレそれで吐いたことあるし」

「マジで」

「マジ。で、ビルドアップ走ってのは、スロー気味にスタートして、少しずつペースをあげていく方法。例えば、最初の一周を五分で走ったら、二周目は四分五十五秒、三周目は四分五十秒って具合にあげていく。インターバル走は、短距離ペースの速い走りの間にジョグペースのゆっくりした走りを入れていくっていうトレーニング。ウインドスプリントもインターバルもトラックだとやりやすいんだけど、ここでやるならビルドアップがいいと思う。それを今度から週に二回くらい入れようと思うんだけど」

アキレス腱を伸ばしながら耳を傾けていた朔は、右足に手を当てて顔をあげた。

「……新、なんかあった？」

新の部屋で言い合いになって以来、三日ぶりの練習だ。昨日も一昨日も、朝五時に玄関で待っていたけれど新は起きてこなかったし、夜も九時過ぎに帰ってきて部屋にこもっていた。

子どもの頃から、新とはほとんどケンカをした記憶がない。そんなふうになると、<sup>③</sup>タイテイ、信じてもらえないか、奇異の目で見られるかのどちらかの反応が返ってくる。もちろんまったくなかったわけではない。新がまだ幼稚園の年中だか年長の頃、一度取っ組み合いのケンカをした。でも幼い頃の三歳差は大きい。体格も腕力も新が兄にかなうはずもなく、あっさり勝負はついた。あのときなんでケンカになったのかは覚えていないけれど、腕力でかなわないことを悟った新は、床の上を駆けまわりながら、顔を真っ赤にして泣きわめいていた。そんな弟の姿を呆然と眺めていたことを、朔はいまも覚えている。

だけど、今回のことはあのときのケンカとは違う。新はあのときのように、かんしゃくを起こしてわめき散らしているわけではない。だから困惑した。なにをどうすればいいのか、なにを言えばいいのか、こじれた関係をどう修復していけばいいのか、朔には見当がつかなかった。新に押し付けられるようなことを言った自分自身に、戸惑いもしていた。

今朝、新が下りてきたときほっとした。新は三日前のことにはひと言も触れず、何事もなかったように、いつも通り、いつも以上に丁寧な走りだった。<sup>3</sup>そのうえ……。

広場の奥にあるテニスコートから、カポン、カポンとのどかなボールの音が聞こえた。

「新」

もう一度朔が言うと、新は「べつに」と答えて、右足にゆっくりと体重をかけながら足の裏を伸ばした。

「<sup>3</sup>してないで、朔もさっさとストレッチ続けるよ」

うん、と頷いて朔は芝生に座って足を伸ばした。

「オレとしては、新がそうやって練習メニユーを考えてくれるの、すげーありがたいんだけど」  
どことなく瞬に落ちないように言う朔を、新はちらと見た。

「朔が言ったんじゃない、メニユー変えたたって」

そうだけど、と口ごもりながら朔が頷くと、新は「<sup>4</sup>言った」

「朔がやりたいって言うのに、オレが反対する理由はないかって思っただけ」

そうか、と朔は足を前に伸ばしてからだを倒した。

「一万メートルの場合だけど、高校で陸上をやっているやつなら三十分を切るっていうのがひとつの目安になる。市民ランナーだと三十五分くらいが目標かな。どっちも大会で上位に食い込むためにはってことだけど」

※<sup>2</sup>境野さんは、練習会の平均は一キロ六分だと言ってたけど」

「市民マラソンなんかの平均は六分台だよ。っていつでも入賞を狙うのなら、四十分前半が目安だと思う。だからこれから少しタイムを意識した練習を」

そう言ったところで新はストレッチを続けている朔を見た。

長座した足先をゆったりとつかんで、ぺたりと前屈している。

「朔って、マジでからだ柔らかいよな」

「そうか？」

「ちよつと、開脚で前屈してみて」

「ああ、うん」

<sup>4</sup>新に言われた通り、足を広げてからだを倒すと鼻先に芝が当たった。土の匂いがする。

「フォーム、変えてみようか」

「へっ？」

朔は手を地面につけて、からだを起こした。

「フォームって、走りの？」

うん、と新は芝の上に腰をおろした。

「朔の走りかたは歩幅が小さいんだ。それが悪いってわけじゃないよ。歩幅を短く刻んで回転数を上げていく走りかたをピッチ走法っていうんだけど、足首への負担が軽くて、ケガなんかも少ない。日本人には合ってるともいわれてる。ただ回転数が多い分、疲れるんだよ」

真剣な表情で頷く朔を見て、新は話を続けた。

「反対に歩幅を広くとるストライド走法っていうのは、足への負担はあるし、筋力のある人に向いてるっていわれてる」

「なら、やっぱりオレはピッチ走法のほうが向いてるんじゃないの？」

「ストライド走法は、スピードが出やすい」

新は、唇をなめた。

「朔は筋力はあるとはいえないけど股関節が柔らかい。股関節が柔らかいってことは、関節の可動域が広いってことだよ。それをいかしてみるつてもアリなんじゃないかと思う」

「やる」

へっ？ 虚を突かれたような声を新は漏らした。

「なんだよ、気の抜けた声出して」

「いや、だって即答するから」

新が口ごもると朔は口角をあげた。

「オレがやらないうって言うと思ったわけ？」

「そういうわけじゃないけど……フォーム変えるってけっこう大変だから」

「でも新はやってみる価値があると思ったんだろ？」

5 「そう、だけど」

「ならやる」

朔は頬を伝う汗を手の甲で拭くと、立ち上がった。

さわさわと木々の葉が揺れる。柔らかな風が肌を撫でるようにして通り抜けていく。

「帰ろう」

そう言って朔が伸ばした手を新はつかんで、腰をあげた。

※1 ジョグ……ゆっくりしたペースで走るトレニング。

※2 境野さん……朔が通っていた盲学校で、陸上部のコーチをしていた人。

問一 〓 ①～⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 4 を補うのに最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ぐつと      イ そろりと      ウ ぼーつと      エ すつと      オ ぼそりと      カ はつと

問三 〓 a・bの意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a ア 信用ならない。      イ 納得できない。      ウ きまりが悪い。      エ 申し訳がたたない。

b ア 問いたされた。      イ 話をさえぎられた。      ウ 不意をつかれた。      エ 弱点をつかれた。

問四 「ブラインドマソン」について述べた次の文のへ1～へ4～に入る最も適切な言葉を、それぞれ文中から指定の字数で抜き出さない。

ブラインドマソンは三つにクラス分けされ、朔は最も障がいの重いクラスに入る。自分の耳だけでは情報が車両の音や他のランナーのへ1二字～などに限られるため、路面状況や他のランナーとの位置関係、カーブや進路変更などは、伴走者のへ2一字～や腕による誘導と、互いが握った長さ五十センチのへ3三字～の動きが頼りとなる。一キロをへ4二字～程度で走るのが市民マソンなどの平均的なペース。

問五 〓 1 「新はにやりとした。」とありますが、この時の「新」の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分にはトレニングの経験がある分、朔に対して優位な立場で話ができることを少し得意に感じている。

イ 朔が無理をしていることが心配だったが、トレニングについて慎重になってくれたので、安心してている。

ウ トレーニングのつらさを朔も理解してくれたので、これまでの練習方法は正しかったと自信を持っている。

エ ケンカではかなわなかったが、朔につらいトレニングをさせれば悔しさを晴らせそうだと期待している。

問六 〓 2 「朔はいまも覚えている。」について、この回想の場面はどこから始まりますか。最初の五字を文中から抜き出さない。

問七 〓 3 「そのうえ……。」とありますが、この後にはどんな言葉が続くと考えられますか。簡潔に答えなさい。

問八 〓 4 「フォーム、変えてみようか」について、タイムを上げたいと考える「朔」に、「新」がフォームを変える提案をしたのは、

二つの走法の違いや兄の持つ特徴をどう考えていたことによりですか。わかりやすく説明しなさい。

問九 〓 5 「ならやる」とありますが、この時の「朔」の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分では気づかなかった長所を見抜く新の観察眼に驚きつつ、新に従うことが二人の関係を修復することになると、喜んでいる。

イ 競技を甘く見ている自分はフォーム変更を断るはずだ、と新が考えているのを感じて、絶対にやってみようと思地になっている。

ウ 新の話が理にかなっていたため、初心者の方が考えることでは新にとっても及ばないことを思い知って、投げやりになっている。

エ 練習に来なかつた間も練習メニューについて考えていた新が、ランナーとして朔をきたえるつもりだとわかって、信頼している。